

藩史研究の基本をなすものである。ただ若干の望外の言を提するならば、岩村役場・町分庄屋引継書、本郷分役場等に延宝の檢地帳はじめ各種基本文献が蔵されている。かかる資料を十分に活用されていたならば、本書は学界にとつてもより豊かな問題を提起したかと惜しまれる。(A5判六〇二頁 昭和三十六年二月 岐阜県岩村町役場刊)(熱田 公)

佐伯 富編

資治通鑑索引

中国史をたくみに整理し、しかもその要を得た書物として、古くより中国はもちろん我が国に於ても最も愛用されたものの一つが、司馬光の撰する資治通鑑である。同書は本文二九四巻からなり、司馬光が一〇六五年(治平二)に宋の英宗の命をうけて、十九年の歲月をすいやし完成した歴史書であり、前四〇三年すなわち周の威烈王の二十三年から、九五九年すなわち後周の顯徳六年に至る一三六二年間の事蹟を編年体にとめた名著で、中国史上その右に出るものがないほど傑作と称され、読む者をして司馬光の気魄の前に心を奪われる感を与えるものである。まさに本索

引の第一頁に挙げられた宮崎市定先生の新版の序にいう「資治通鑑は単に唐以前の正史の縮本たるのみでなく、実に正史を解説するための津梁でもある」という言葉が、びつたりする表現である。宮崎先生は同じその序の中で「われらの恩師桑原隨藏先生は繰返し、たんに資治通鑑を読まれた。先生の尤大な蔵書は先生の逝去後、あげて京大東洋史研究室に寄贈されたが、先生手沢本の山名本資治通鑑はお宅に家宝として留置きを願つてある。それには毎頁先生が朱墨で書入れを施していられる」といわれ、桑原博士がいかに資治通鑑を愛されたかを物語る語を紹介されている。このことは、また桑原博士の書をみても知られることで、同博士が大正三年につくられ、今なお好著にあげられる「中等東洋史教授資料」をひもとけば、随処に資治通鑑を引用された跡がみえ、時には「委細につきては資治通鑑をみるべし」と特記されている。博士はなお十八史略をも尊重されたが、おそらく同「教授資料」の幾割かは、資治通鑑と十

八史略によつて出来たものであるといえる。この点からいえば、資治通鑑は学者たるものの教養の書であつた。したがつて資治通鑑

が与えた影響は、古今東西にわたつて甚だ大なるものがあり、通鑑の名を冠した著作がその後つぎつぎと撰述された。宋の劉恕の「通鑑外紀」しかり、宋の李燾の「續資治通鑑長編」しかり、宋の袁枢の「通鑑紀事本末」しかり、宋の朱熹の「資治通鑑綱目」しかり、くだつては清の畢沅の「続資治通鑑」しかり。その他影響をうけた書をかぞえ挙げれば枚挙にいとまない有様である。しかし資治通鑑そのものの注釈としては、胡三省の注をおいて他に比すべきものがなく、本文に劣らず名著と称され、現今行なわれている版刻のほとんどが、この注釈を含めたものである。我が国でも山名本や伊勢津藩本など幾種の和刻本が出されたが、一九五六年には中国の古籍出版社が再びこれを排印して、すべての年号には西暦を補入し、標点分段を加え、要処々々に校注をも施こして、ますます利用しやすくなつてきたのである。

古き時代に於ては通鑑学という呼称も行なわれる程、重要であるとともに必要な書であつて、東洋学を学ぶ者にとつては当然全部を通読することが要請された。これは今日に於ても變りないことであらう。学問はインス

タントに片づけられるものではない。しかし時には通鑑に用いられた用語を一句求めて、他の研究に役立たせることが大切な場合もある。とくに正史の結晶ともいべき資治通鑑に於ては、他書との関連の上からみても甚だ有用なことがある。ここに本索引の刊行された意義がある。貝塚茂樹先生の序によれば、この索引は昭和十四年に佐伯富先生をはじめ、同窓生らの手によつて、すでに一応は脱稿されていたのを、昭和二十五年に油印に付した「資治通鑑索引稿」がもとなつてゐる。

その後今日まで十年あまり、筆者の手にあつた同書も、講読や研究に日夜つかわれて、赤や青が各処に入り、すでに満身瘡痍の状態になつてきていたのである。また講読をするたびに学生の人から入手の道がないかと聞かれたが、もはやとくに売切れとかで、早くから各方面より再刊の要望が高まつていたものである。

それが今回ここに装いを新たにし、若干の補訂を加えるとともに、資治通鑑目録、総索引、四角號碼索引を加えて、活版により出刊されたのを見た時、無上の喜びを感じたのは、あえて私一人のみではなからうと思う。

しかも旧版に於てはそのもつとく所の版本に山名本を使用したのが、今回は他の四部備要本、伊勢津藩本、及び古籍出版社排印本でも使用できるように、主要版本対照表を付加されたことは、はるかに進歩であると思う。ただ欲をいえば、最も新しい古籍出版社の資治通鑑が、かなり普及している現在、その項目の所在は山名本の所在を示すそれぞれの個所に対応して示された方が、使いやすくまた国際的価値もより高くなつたことと惜しまれる。勿論対照表によつて探し出せるものであるが、索引を利用するという目的の中には、なるべく迅速にその項目を見つけたという気持があり、ともすれば換算して探すという手間に多少かしさを感ずるものであるから。

本索引の特色は食貨・職官・選舉・兵制などの社会・経済・制度等の名辭に關して、その語の内容をもつともよく説明された個所を主として採つてあることである。平均して山名本の一葉について五項目強の項目が収録されているが、何といつても全二九四巻という大部の中から集めたものであるから、同じ語句が幾つも出てくることは当然であり、これを網羅するにはわずか本索引二三八頁ではと

ても不足であらう。したがつて個有名詞や一般的な地名はすべて省略してあり、各事項についてもとくに代表的な個所のみに限定されたようであつて、いわば通鑑の事項索引ともいべきものである。しかし本索引によつて龍大な資治通鑑の精華が自分の掌中に入つたような感がするもので、とくに胡三省の註をも本文同様に見つけ出せることは有難い。かくて中国史にあらわれる主要語句を本索引によつて知ることが、東洋学を専攻する学徒には勿論、日本史家にも裨益すること多大であると信ずるものである。(A5版三三頁)

東洋史研究資料叢刊之三 東洋史研究会発行
八〇〇円) (間野潜龍)

奈良盆地

最新奈良盆地誌

前書は雌子二郎博士の奈良女子大学での定年退官を記念した奈良女子大学地理学教室編の學術的論文集、後書は堀井甚一郎教授の昭和十年出版の同名書の徹底した改訂書であり、ともにわが国古代文化の中心地大和を研究の対象としている。本二書を『史林』に紹